

《 研究ノート 》

柔道の普及と変容に関する研究
～グレイシー柔術に着目して～（その3・完）

谷釜 尋徳

6. グレイシー柔術のアメリカ進出

エリオ・グレイシーが展開した数々の異種格闘技戦を通して、グレイシー柔術の優位性がブラジル国内において認知されていったが、これが直ちに世界各国に伝播していったわけではなかった。

全盛期を過ぎたエリオは、1960～70年代にかけてブラジリアン柔術グアナバラ州協会の会長として帯の階級や試合時間などの規定を整理し、グレイシー柔術の普及発展に努めていた。やがて、エリオの長男ホリオンの尽力によって、グレイシー柔術が世界の格闘技界を席卷していくことになる。ここでは、その模様を時系列で概観することにした。

6-1 ホリオン・グレイシーのアメリカ進出

グレイシー柔術のアメリカ進出の道を拓いたのは、エリオの長男ホリオン・グレイシーであった。ホリオンがはじめて渡米したのは17歳の時分で、ロサンゼルスやハワイに約1年間滞在している。その際、アメリカにおけるグレイシー柔術の認知度の低さを目の当たりにしたホリオンは、この地にグレイシー柔術を普及させることを目標として掲げるに至った⁸⁸⁾。

ホリオンはブラジルに帰国後、大学卒業や弁護士資格の取得を経て7年後に再度渡米し、昭和53（1978）年にはロサンゼルスハマサビーチに道場を開設した。ここを拠点にグレイシー柔術の普及に努めたホリオンは、当時の模様を次のように回顧している。

「最初は道場と呼べるようなものではなかった。借りた家のガレージにマットを敷いて練習を始めたんだ。自分で手書きで作ったチラシを配ったり、街で出会った人に声をかけたりしているうちに道場生は少しずつ増えていった。でも、まだまだ生徒数は少なかったし柔術を教えているだけでは、とても生活できなかった。」⁸⁹⁾

前述したように、グレイシー柔術のアメリカでの認知度は低調であったが、その状況を打開すべくホリオンが講じた方策は「異種格闘技戦」を行うことであった。かつて前田光世やエリオ・グレイシーが数々の他流試合に挑んだように、ホリオンもまた同様の手法をもってグレイシー柔術の優位性を広くアメリカ社会に知らしめようと考えたのである。

ホリオンは雑誌広告等を通して対戦相手を募り、道場としていたガレージを主な会場に「グレイシー・チャレンジ」と称する異種格闘技戦を繰り返した⁹⁰⁾。最初の対戦相手は、ランファ・アレグリアというキックボクサーであったが、ホリオン本人が「ガレージのマットの上で私は、すぐに相手をタックルで倒しチョークを決めた。ほんの数分の戦いだった。」⁹¹⁾と振り返るように、寝技に持ち込んでの圧勝であったという。

これを皮切りに「グレイシー・チャレンジ」を継続した結果、ロサンゼルス
の格闘技界におけるグレイシー柔術の認知度は徐々に高まっていった。「誰の挑戦でも受ける」と公言したホリオンは、「グレイシー・チャレンジ」において無敗を誇ったという⁹²⁾。

やがて、グレイシー柔術の普及に連れてホリオンが経営する道場の生徒数が増加したため、昭和61（1986）年に弟のホイス・グレイシーがブラジルから渡米することとなった。平成元（1989）年には「グレイシー柔術アカデミー」がロサンゼルス近郊の都市トーランスに開校される。このようにして、グレイシー柔術はアメリカにおいて着実に根を下ろしていったのである。

6-2 UFC の開催とその影響

以上のように、ホリオンによってグレイシー柔術のアメリカ進出が推し進められていったが、彼はやがてテレビ局と組んで格闘技イベントの開催を手掛けることになる。後に世界中の格闘技界に影響を及ぼした「The Ultimate Fighting Championship」（以下「UFC」）の始まりである。

手始めにホリオンは、門下生でもあったアート・デイビーと共同で WOW というプロモーション会社を興し、ニューヨークのケーブルテレビ局（SEG 社）との交渉に入った。ホリオン自身がインタビューの中で「様々な格闘技が集って戦うという点が視聴者の興味を引いたんだ。それが最大の目的だ。」⁹³⁾と語っているように、この格闘技イベントはグレイシー柔術の十八番である異種格闘技戦を意図するものであったといえよう。

かくして、SEG 社を興行主として、平成 5（1993）年11月12日にコロラド州デンバーにおいて UFC の第 1 回大会が開催の運びとなった。この大会で優勝したのはホイス・グレイシーであったが、ホイスの活躍がテレビ放送を通して世界中に報じられたことを契機に、グレイシー柔術の優位性が広く知れ渡ることとなる。

第 1 回大会におけるホイスの戦いぶりは、以下の通りである。1 回戦はボクサーのアート・ジマーソンを縦四方固めで下し（2 分11秒）、続く 2 回戦でも、プロレスラーのケン・ウェイン・シャムロックに対して寝技に持ち込み、最終的には裸締めで勝利している（1 分02秒）。決勝戦はオランダの総合格闘家ジェラルド・ゴルドーとの対戦となった。開始早々、ホイスはタックルを試みて寝技に持ち込むと、1 分59秒に仕掛けた裸絞めにゴルドーがタップして勝負は決着した⁹⁴⁾。このように、UFC におけるホイスの戦いぶりは、寝技に強みをもつグレイシー柔術の特徴を際立たせるものとなった。

なお、ホイスは平成 6（1994）年 3 月11日開催の第 2 回大会においても優勝を収め、連覇を達成した。この大会では、ホイスは初戦で日本人の市原海樹と対戦しているが、5 分12秒に変形送り襟絞めで退けている。

UFC におけるホイスの活躍は、グレイシー柔術のアメリカ進出に多大なる

影響を及ぼした。ホイスの快挙によってグレイシー柔術の競技人口が増加したばかりか、ブラジルで活動していた柔術家がこぞって渡米するようになり、アメリカ国内に柔術関連の道場が林立する事態を招来した⁹⁵⁾。ホリオンが目論んだグレイシー柔術のアメリカ進出は、格闘技イベント UFC の開催を通して概ね達成されたといえよう。

UFC におけるホイスの連覇は、遠く日本でも大々的に報じられていた。雑誌『秘伝古流武術』の平成 6（1994）年 7 月発売号には、グレイシー柔術関連の特集が組まれ、ホイスの UFC での戦術が次のように総括されている。

「とにかくいつの場合でも、一刻も早く相手に組み付いて倒すか、柔道のもろて刈りのようなタックルで倒す。そればかりを狙う。そして、相手を倒すと馬乗りになる。万一、自分が下になった場合は体を入れ換えて逆転して、優位な馬乗りの態勢を確保しようとする。その間も、相手の反撃をできるだけ受けないように、道衣の袖を持つなり、腕で抱え込むなりして動きを封じながら、臨機応変に首を絞めたり、肘を極めたりしてギブアップをさせる。ほとんどの場合、締めか関節で仕留めるが、それが困難なときは、馬乗り状態で雨あられと相手に速射砲のような突きを浴びせ、戦意を奪ってギブアップさせることもある（関節や締めは不利な態勢からでもチャンスがあればいつでも取りにいく）。」⁹⁶⁾

上記の解説から、ホイスに代表されるグレイシー柔術が相手を「タックルで倒す」ことによって寝技に持ち込み、その後は締め技か関節技で仕留めようとするものであったことが窺える。また、同特集記事には「グレイシー柔術が実戦で使う技はごく限られているが、技自体は柔道の技である。」⁹⁷⁾ との見解が示されている。当時の日本では、グレイシー柔術とはかつて前田光世がブラジルに持ち込んだ講道館柔道の技術体系を、寝技に特化して編み上げたものであったと理解されていたのである。

7. グレイシー柔術の日本進出

ここでは、アメリカで一世を風靡したグレイシー柔術が、そのルーツを持つ日本に「帰還」し、国内に普及していった模様を記述するものである。

7-1 グレイシー柔術の日本進出とその戦績

ホイス・グレイシーがUFCの第2回大会で連覇を成し遂げた直後、日本の格闘技界にもグレイシー柔術の波が押し寄せることとなった。そのはじまりは、平成6（1994）年7月に千葉県の東京ベイNKホールで開催された「バリ・トゥード1994ジャパン・オープン」である。この大会には、エリオの三男ヒクソン・グレイシーが参戦を表明したが、UFCの覇者ホイスがアメリカの格闘技専門誌上で「兄ヒクソンは、僕の10倍強い」と公言したことから、当時ヒクソンには世界中から熱い視線が注がれていたという⁹⁸⁾。

大会の結果は、ヒクソンが日本人を含む並み居る格闘家を抑えて優勝している。ヒクソンの1回戦の相手は日本人の西良典であったが、1ラウンド2分58秒に裸絞めが極まって勝利した。続く2回戦はダビット・レビキ（米）と対戦し、1ラウンド2分40秒でKO勝ちを収めている。決勝戦はキックボクサーのバド・スミス（米）と闘うも、1ラウンド僅か39秒でKO勝ちし、見事優勝の栄冠に輝いた。なお、今大会のヒクソンの戦い方は、ホイスの場合と同様に、タックルで相手を倒してから寝技に持ち込むものであったと総括されている⁹⁹⁾。

翌年、同大会の第2回大会が東京の日本武道館で開催されているが、この大会でもヒクソンは山本宜久、木村浩一郎、中井祐樹といった日本人を次々と寝技（裸絞め）で攻略して連覇を達成した。

平成9（1997）年10月には、東京ドームにて総合格闘技イベント「PRIDE」の第1回大会が開催される。今大会のメインイベントはヒクソンと高田延彦との「世紀の一戦」であったが、この対戦はヒクソンが1ラウンド4分47秒に腕ひしぎ十字固めで勝利している。

表8は、平成9（1992）年から平成16（2004）年までのグレイシー一族と日

表8 グレイシー族と日本人格闘

対戦年月日	場所（会場）	イベント名
1994.3.11	米国コロラド州デンバー （マンモス・イベントセンター）	UFC- 2
1994.7.29	千葉（東京ベイ NK ホール）	バーリ・トゥード1994 ジャパン・オープン
1994.12.7	米国カリフォルニア州	道場破り
1995.4.20	東京（日本武道館）	バーリ・トゥード1995 ジャパン・オープン（1回戦）
		（同準決勝）
		（同決勝）
1995.11.18	米国ノースカロライナ州ウィルミントン （カールコ・スタジオズ）	エクストリーム・ダイティング
1996.7.7	千葉（東京ベイ NK ホール）	バーリ・トゥード1996 ジャパン・オープン
1997.10.11	東京（東京ドーム）	PRIDE- 1
1998.3.15	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE- 2
1998.10.11	東京（東京ドーム）	PRIDE- 4
1999.11.21	東京（有明コロシアム）	PRIDE- 8
1999.12.22	大阪（大阪府立体育館）	KING of KINGS B ブロック
2000.1.30	東京（東京ドーム）	PRIDE グランプリ2000開幕戦
2000.2.26	東京（日本武道館）	KING of KINGS GRAND-FINAL
2000.5.1	東京（東京ドーム）	PRIDE グランプリ2000
2000.5.26	東京（東京ドーム）	コロシアム2000
2000.8.27	埼玉（西武球場）	PRIDE-10
2000.12.23	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-12
2001.1.8	愛知（愛知県体育館）	
2001.7.29	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-15
2001.11.3	東京（東京ドーム）	PRIDE-17
2002.2.24	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-19
2002.6.23	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE-21
2002.8.28	東京（国立競技場）	Dynamaite!
2002.9.29	愛知（名古屋レイボーホール）	PRIDE-22
2002.12.23	福岡（マリンメッセ福岡）	PRIDE-24
2003.8.31	東京（両国国技館）	PANCRASE 2003 HYBRID TOUR
2003.10.5	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE 武士道
2003.12.31	埼玉（さいたまスーパーアリーナ）	PRIDE SPECIAL 男祭り
2004.2.15	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE 武士道～其の式～
2004.5.23	神奈川（横浜アリーナ）	PRIDE 武士道～其の参～
2004.10.14	大阪（大阪城ホール）	PRIDE 武士道～其の五～

『総合格闘技20年史』ベースボール・マガジン社、2003年／『最強伝説 グレイシー

家との対戦結果一覧(1994~2004年)

対戦カード(○→勝/●→負/△→分)	決まり手	時間
○ホイス・グレイシー vs. 市原海樹●	変形送り襟絞め	5分12秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 西良典●	裸絞め	1 R. 2分58秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 安生洋二●	裸絞め	6分45秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 山本宜久●	裸絞め	3 R. 3分49秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 木村浩一郎●	裸絞め	1 R. 2分7秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 中井祐樹●	裸絞め	1 R. 6分22秒
○ハウフ・グレイシー vs. 村岡真●	裸絞め	0分42秒
○ホイラー・グレイシー vs. 朝日昇●	裸絞め	1 R. 5分7秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 高田延彦●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 4分47秒
△ヘンゾ・グレイシー vs. 小路晃△	引き分け	
○ホイラー・グレイシー vs. 佐野友飛●	腕ひしぎ十字固め	33分14秒
○ベンゾ・グレイシー vs. 菊田早苗●	首固め	6 R. 0分43秒
○ヒクソン・グレイシー vs. 高田延彦●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 9分30秒
●ホイラー・グレイシー vs. 桜庭和志○	TKO	2 R. 13分16秒
○ヘンゾ・グレイシー vs. アレクサンダー大塚●	判定 5-0	
○ヘンゾ・グレイシー vs. 坂田亘●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 1分25秒
○ホイス・グレイシー vs. 高田延彦●	判定 3-0	
●ヘンゾ・グレイシー vs. 田村潔司○	判定 0-3	
●ホイス・グレイシー vs. 桜庭和志○	TKO	6 R 終了
○ヒクソン・グレイシー vs. 船木誠勝●	裸絞め	1 R. 11分46秒
●ヘンゾ・グレイシー vs. 桜庭和志○	TKO	2 R. 9分43秒
○ハイアン・グレイシー vs. 石澤常光●	TKO	1 R. 2分16秒
●ハイアン・グレイシー vs. 桜庭和志○	判定 0-3	
△ホイラー・グレイシー vs. 村浜武洋△	引き分け	
●ハイアン・グレイシー vs. 石澤常光○	KO	1 R. 4分51秒
○ヘンゾ・グレイシー vs. 小原道由●	判定 3-0	
○ホドリゴ・グレイシー vs. 松井大二郎●		3 R. 0分28秒
●ヘンゾ・グレイシー vs. 大山峻護○	判定 0-3	
○ダニエル・グレイシー vs. 杉浦貴●	判定	
●ホイス・グレイシー vs. 吉田秀彦○	KO	1 R. 7分24秒
○ハイアン・グレイシー vs. 大山峻護●	腕ひしぎ十字固め	1 R. 1分37秒
○ボドリゴ・グレイシー vs. 佐々木有生●	判定 3-0	
○クラウスレイ・グレイシー vs. 國奥麒麟真●	判定 3-0	
○ハイアン・グレイシー vs. 浜中和宏●	KO	1 R. 7分37秒
○ホドリゴ・グレイシー vs. 高瀬大樹●	判定 3-0	
●ダニエル・グレイシー vs. 中村和宏○	判定 0-3	
○ハウフ・グレイシー vs. 三島☆ド根性ノ助●	判定 3-0	
○ダニエル・グレイシー vs. 坂田亘●	腕ひしぎ十字固め	1 R 7分12秒
△ホイス・グレイシー vs. 吉田秀彦△	引き分け	
○ホドリゴ・グレイシー vs. 桜井マッハ速人●	判定 3-0	
○ハイアン・グレイシー vs. 美濃輪育久●	判定 2-1	
●ハウフ・グレイシー vs. 五味隆典○	KO	1 R. 0分6秒
○クラウスレイ・グレイシー vs. 桜井マッハ速人●	腕ひしぎ十字固め	2 R. 1分02秒

族の攻防』河出書房新社、2004年、より作成。

本人格闘家との対戦記録を整理したものである。ヒクソンをはじめとするグレイシー一族の面々が、日本人に対して高確率で勝利することで、「母国」日本におけるグレイシー柔術の優位性を知らしめていった模様が看取される。

ここで注目すべきは、グレイシー側が勝利した際の決まり手として、柔道という「固め技」が多くみられることである。今日の柔道（JUDO）は国際化と引き換えに様々な要素を捨象していったが、グレイシー柔術は前田光世が伝えた講道館柔道を固め技（寝技）に特化して継承し、度重なる異種格闘技戦を経て作り上げられたためであろう。

7-2 日本におけるグレイシー柔術の普及と展開

このようにして、グレイシー柔術の使い手が各種の格闘技戦において好成績を収めるに連れて、日本人格闘家の中にもプロ・アマ問わずこれを習得しようと試みるものが現れる。

とりわけ、平成10（1998）年には日系ブラジル人を中心に「日本ブラジリアン柔術連盟（BJJFJ）」が発足するが、これがグレイシー柔術普及のための大きな契機となったという¹⁰⁰⁾。同連盟の初代会長に就いたのは、かつてブラジルでヒクソンから直接手解きを受けた渡辺孝真であった。BJJFJは同年8月に東京で第1回「全日本ブラジリアン柔術選手権大会」を開催しているが、この大会は現在（2014年3月現在）までに14回を数えている。なお、「国際ブラジリアン柔術連盟（IBJJF）」の傘下にある同連盟では、帯の保持や登録団体であることを保証する証明書の発行を実施している。

やがて、平成20（2008）年にはヒクソンを会長に据えた「全日本柔術連盟（JJFJ）」が設立され、相談役にはかのエリオ・グレイシーが就任した。同連盟ではメインの大会として、設立初年より「全日本柔術選手権大会」を開催し、今日まで継続している。

こうした柔術関連団体の設立と相まって、日本でもグレイシー柔術を教授する道場が目立つようになり、その競技人口も増加傾向を辿っていくことになる。ヒクソンが持ち込んだグレイシー柔術は、着実に日本の格闘技界に根を下

ろしていったといえよう。

8. おわりに

本稿は、柔道という日本固有の武道文化が、日本の文化圏を飛び出してどのように普及および変容していったのかについて、特にブラジルにおける柔道の変容形態たるグレイシー柔術に着目して論じたものである。

検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 柔道の前身たる柔術の原形は、中世の武士が合戦時の白兵戦を想定して訓練していた「組打ち」などにみることができる。やがて、近世になって泰平の世が実現すると、柔術は実用術としての姿を捨て去って武芸化し、多くの流派が乱立していった。幕末期における柔術の技術体系は、投げ技、固め技、当て身技の三つに集約されるものであったが、これが明治期になって嘉納治五郎をして「柔道」という名称で体系化されることとなる。
2. 明治15（1882）年、嘉納治五郎は東京の下谷区に「講道館」という道場を開設した。若い時分より柔術を嗜んできた嘉納は、投げ技を重視する「起倒流」と固め技を中心に据える「天神真楊流」の技術体系を折衷させた柔術を指南していた。やがて、明治20（1887）年頃になると、嘉納は上記二流派の折衷的な段階を脱して独自の「講道館柔道」としての技術体系を形成していった。
3. 明治30（1897）年、東京専門学校（現・早稲田大学）の学生であった前田光世が講道館に入門する。すでに中学時代より柔道の稽古に励んでいた前田は、講道館入門後ただちに頭角を現し異例のスピードで昇段していった。その実力を見込まれた前田は、講道館柔道の海外普及を託されたメンバーのうちに抜擢され、明治37（1904）年に渡米することになる。
4. 前田はアメリカを皮切りに、イギリス、ベルギー、スペイン、キューバ、メキシコ、グアテマラ、ブラジルを渡り歩き、各国の格闘家を相手に数多くの「異種格闘技戦」を繰り広げていった。柔道の海外普及のためには、他流試合における勝利を通してその優位性を証明することが当を得た手法

だと考えたからである。

5. 講道館時代の前田は固め技（寝技）を好まなかったが、彼は異種格闘技戦の大半を固め技で勝利している。対戦相手の多くはレスラーであったが、戦いに勝つには彼らが得意とする寝技の攻防に長けている必要があったため、前田はこれを契機に高度な固め技を習得していったのである。前田の講道館柔道は、数々の異種格闘技戦を経て固め技（寝技）を重視するものへとシフトしていったといえよう。
6. 明治40年代より、多くの日本人がブラジルに移住するようになる。彼ら日系移民の中で柔道の心得のある者達は、道場を開いてブラジル人に柔道を教授したり、現地の格闘家と異種格闘技戦を行うなどして柔道の普及に努めていた。ブラジルへの柔道の伝播は、日系移民のブラジル入植とほぼ同時に始まっていたのである。したがって、前田光世が柔道伝播を目的にブラジルに到達した時には、当該地域において柔道を受容し得る素地がある程度整えられつつあったといえよう。
7. 大正3（1914）年、前田はブラジルに到達し、サンパウロやリオ・デ・ジャネイロ等々を経て翌年にはアマゾン川河口のベレンに至った。前田はベレン市内において道場を開設し、柔道の普及に勤しんでいた。前田が柔道の手解きをした者の中に、現地の政治家ガスタオン・グレイシーの長男カルロス・グレイシーがいた。そこで教授した柔道とは、立ち技を中心としながらも、ある程度の寝技が含まれたものであったという。
8. グレイシー家がリオ・デ・ジャネイロに移住した際、カルロスは前田から継承した柔道を広めるべく、大正14（1925）年に「グレイシー柔術アカデミー」という道場を創設し、ここに「グレイシー柔術」が誕生する。カルロスの弟エリオ・グレイシーは、兄が「グレイシー柔術アカデミー」で指導する模様に接しながら自らも柔術にのめり込み、兄を凌ぐ実力を身につけて道場の中心的な指導者にとって代わることとなった。
9. グレイシー柔術の普及を目指したエリオは、前田光世の場合と同じく異種格闘技戦に挑戦するようになった。エリオの主な対戦相手は、ボクサー、

レスラー、日系人柔道家であったが、いずれも敗戦することはなく勝利を積み重ねていった（引き分けも含む）。昭和26（1951）年、日本でも名高い柔道家らが訪伯し、エリオと一戦を交えた。まず、エリオは加藤幸夫と対戦し、1戦目は引き分けたものの2戦目では前十字絞めで勝利している。次いで、日本人最強の柔道家の呼び声高い木村政彦との対戦が実現するが、エリオは木村の仕掛けた固め技によって失神し、生涯唯一の敗北を喫した。

10. こうした数々の異種格闘技戦の過程において、エリオは独自の技術体系を練り上げていった。エリオの兄カルロスの柔術は「立ち技」が主体であったとされるが、エリオの試合運びは大半が「寝技」に持ち込むことを主要な戦術としていたからである。後にエリオを発信源として広まっていくグレイシー柔術とは、前田光世がブラジルに伝えた数々の柔道技のうち、「寝技」こそが実戦を想定した場合に有効だと捉えたエリオが、その部分に特化して体系化したものであったといえよう。
11. グレイシー柔術の世界進出の道を拓いたのは、エリオの長男ホリオン・グレイシーであった。ホリオンは昭和53（1978）年にロサンゼルスに道場を開設するが、グレイシー柔術のアメリカでの認知度が低調であったことから、道場を拠点として「グレイシー・チャレンジ」と称する異種格闘技戦を継続的に実施した。その結果、グレイシー柔術の認知度の高まりと同時に道場生が増加し、平成元（1989）年にはトーランスに「グレイシー柔術アカデミー」を開校した。
12. こうして、グレイシー柔術が徐々にアメリカに根を下ろしていくが、やがてホリオンはテレビ局と組んで大規模な格闘技イベントを企画し、平成5（1993）年に第1回「UFC」を開催する。この第1回と第2回大会で圧倒的な強さをみせて連覇を達成したのは、ホリオンの弟ホイス・グレイシーであった。その活躍が世界中にメディアを通して報じられたことで、グレイシー柔術の優位性がアメリカのみならず世界中に知れ渡っていった。
13. グレイシー柔術の世界進出の波は、すべからず日本にも押し寄せることと

なった。そのはじまりは、平成6（1994）年開催の「バーリ・トゥード 1994ジャパン・オープン」であった。この大会には、エリオの三男ヒクソン・グレイシーが参戦し、日本人を含む並み居る格闘家を抑えて優勝を収めている。その後も、ヒクソンをはじめとするグレイシー一族の面々が日本人に対して高確率で勝利することで、「母国」日本においてグレイシー柔術の優位性が急速に認知されていった。なお、エリオに由来する技術体系を継承したグレイシー一族は、勝利した試合の大半を「寝技」によって決着させている。

14. グレイシー柔術の使い手が日本国内で好成績を収めていくに連れて、日本人の間にもプロ・アマ問わずその習得を試みるものが現れた。また、平成10（1998）年には「日本ブラジリアン柔術連盟（BJJFJ）」が、平成20（2008）年には「全日本柔術連盟（JJFJ）」が設立され、柔術を教授する道場が相次いで開かれて競技人口も増加傾向を辿っていった。

以上述べてきたように、日本で嘉納治五郎が創始した講道館柔道は、その海外普及を託された前田光世の手で一旦ブラジルへ伝播し、それがエリオ・グレイシーを経由してグレイシー柔術として醸成された後、今度はエリオを頂点とするグレイシー一族の方が世界進出の道中で母国日本にもこれを持ち込み、日本の格闘技界を席卷していったと結ぶことができよう。

【注記および引用・参考文献】

- 88) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋、2003年、65頁。
- 89) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋、2003年、67頁。
- 90) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋、2003年、73～74頁。
- 91) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋、2003年、74頁。
- 92) 近藤隆夫「グレイシー一家 4 大インタビュー ホリオン・グレイシー」『グレイシー柔術の一冊 ワールドボクシング 5 月号増刊』日本スポーツ出版社、1995年、65頁。
- 93) 近藤隆夫「グレイシー一家 4 大インタビュー ホリオン・グレイシー」『グレイシー柔術

の一冊 ワールドボクシング 5月号増刊』日本スポーツ出版社、1995年、69～70頁。

- 94) 「THE UFC DIGEST」『グレイシー柔術の一冊 ワールドボクシング 5月号増刊』日本スポーツ出版社、1995年、190～192頁。
- 95) 近藤隆夫『グレイシー一族の真実』文藝春秋、2003年、124頁。
- 96) 別宮三敬「闘争の実験場から垣間見える柔術の正体—特集グレイシー柔術—」『秘伝古流武術』24号、1994年7月、27頁。
- 97) 別宮三敬「闘争の実験場から垣間見える柔術の正体—特集グレイシー柔術—」『秘伝古流武術』24号、1994年7月、30頁。
- 98) 渋谷恵介『最強伝説 グレイシー一族の攻防』河出書房新社、2004年、41頁。
- 99) 「THE UFC DIGEST」『グレイシー柔術の一冊 ワールドボクシング 5月号増刊』日本スポーツ出版社、1995年、210～212頁。
- 100) 川越和人「還流する Jiu-Jitsu—『移民』とブラジリアン柔術」『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム—』青弓社、2010年、261～264頁。

[付記]

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究 B）の助成を受けた研究成果の一部である。

—たにがま ひろのり・法学部准教授—